

白井と北総の子安塔 - 慈母像石塔の系譜を追って-

藤 由美

1. ムラの民間信仰の石造物の種類と白井市内の事例

(1) 庚申塔

庚申待は、60日に1回庚申(かのえさる)の夜に集まって、徹夜で長寿などを祈る信仰で、江戸時代からは、三猿や青面金剛を彫った庚申待供養の石塔建立が流行した。

・白井市内庚申塔数は271基＝木・所沢の鷲神社下庚申塚(寛文10年1670)・谷田庚申塚(寛文10年)～折立熊野神社(昭和56年1981)

(2) 出羽三山供養塔

ムラの壮年期の男性が講を組んで登拝する奥州出羽三山信仰では、集落の奥高い所には梵天塚を築き、大日如来像を安置、登拝後記念碑の石建てを行う。

・白井市内出羽三山碑は88基(うち江戸期12、近代44、戦後31)＝根・白井新田天神社(明和8年1771)～平塚延命寺(昭和59年1984)

(3) 馬頭観音塔

憤怒顔で、煩惱諸悪を排除する観音菩薩として信仰されたが、頭上に馬頭をいただくことから、馬の守護と供養を目的に造立されるようになった

・白井市内の馬頭観音塔は91基＝富塚鳥見神社(宝暦2年1752)～富塚木下墓地(昭和48年1973)

(4) 道祖神

岐(ふなど)の神・塞(さえ)の神である道祖神は、ムラ内への悪霊侵入を防ぎ、道路と道行く旅人を守り、また子授け・安産の御利益のある神である。

・白井市内の道祖神は31基＝復・富ヶ谷鳥見神社(享保15年1730)～中台火の見(昭和29年1954)

(5) 二十三夜塔

旧暦23日の夜に講の仲間が集まり、月の出を待って念仏や経を唱えてお籠りする月待の講の供養塔。本尊は勢至菩薩だが、文字塔が多い

・白井市内の二十三夜塔は28基＝中木戸諏訪神社(元禄11年1698)～本郷集会所(大正7年1918)

2. 女人信仰の石造物

(1) 十九夜塔

関東北東部では、旧暦19日の夜、女性が寺や当番の家に集まって、如意輪観音の坐像や掛け軸の前で経文、真言や和讃を唱える「十九夜講」が盛んに行われていた。この十九夜講が、祈願の信仰対象あるいは成就のあかしとして建立する石塔が「十九夜塔」で、初期は六臂像、やがて右手を右ほほに当てた思惟相で右ひざを立てて座る姿の二臂の如意輪観音像が多く主尊として彫刻された。

・白井市の十九夜塔と女人信仰関連の如意輪観音像塔数は99基＝平塚延命寺(寛文10年1670)～復・上長殿(明治35年1902)

(2) 子安塔

子授け・安産・子供の健やかな成育を祈願するために、ムラの女性たちの「子安講」が造立した石塔や石祠を「子安塔」、子を抱く慈母像を「子安像」、その像容を刻んだ石造物を「子安像塔」とよぶ。

江戸時代の地域の民俗信仰に由来し、仏典などの儀軌にはないオリジナルな石仏である。主尊は「子安大明神」・「子安観音」と称し、江戸中期から現れ、幕末から十九夜塔に代わって多数建てられた。

・白井市内子安塔数は57基

子安明神文字石祠2基＝平塚鳥見神社(寛政12年1800)～河原子天神社(文化3年1806)

子安像石祠＝今井青年館(文政13年1830)

子安像塔55基＝中木戸観音堂(文化6年1809 筆者推定)～本郷集会所(平成11年1999)

表1.白井市内の女人信仰の石塔数(時代別)

時代区分/基数	近世(江戸時代)			近代	現代	不明	計
	前期	中期	後期				
如意輪像十九夜塔	18	31	23	4	0	6	82
如意輪像塔(念仏・講中)	4	2	2	0	0	0	8
「十九夜」文字塔	0	0	4	5	0	0	9
子安石祠	0	1	2	0	0	0	3
子安像塔	0	0	11	34	8	1	54
計	22	34	42	43	8	7	156

3. 北総の子安像塔

北総（下総地域）、特に印西・八千代市など印旛沼周辺から利根川下流域は、女人講による子安像塔の数が多地域で、1000基以上の子安像塔がある。そのうち記年銘のある塔は、江戸中期（1717～1803年）までが109基、江戸後期前半（1804～1843）175基、江戸後期後半（1844～1867）120基で、江戸時代計は404基、明治からの近・現代では525基、総計934基が現存する。

(1) 北総の女人信仰に関わる石造物の分布とその時代的推移

北総の女人信仰関連石造物は、江戸初期～中期（17世紀後半から18世紀代）にかけてほとんどが如意輪観音像の十九夜塔で推定1200基以上ある。

一方、子安像塔の建立数が十九夜塔の数を上回るのは幕末以降で、近代になって爆発的に増える。

(2) 子安像塔出現期の像容の特徴と系譜

千葉県最古の子安像塔は、上総の袖ヶ浦市百目木子安神社の元禄4年の「子安大明神」石祠で、①二児を配した子安像が②石祠内にある。

北総では、酒々井町尾上神社の享保18年（1733）「子安大明神」銘の立像が初出。これに次ぐ元文5年酒々井町の子安像石祠は①と②の特徴をもつ。同じく酒々井町尾上住吉神社の宝暦元年の子安像塔は③思惟相型の如意輪変形像で、①②③の特徴は北総の江戸中期子安像塔のもつ特異な要素となっている。北総の子安像塔発祥の地域は酒々井町と推定され、18世紀末までに8基の建立があり、ここから隣接する旧印旛村・日本埜村・成田市へ広がる様相が確認できる。

(3) 江戸時代後期から近現代までの子安像塔の特徴

後期前半（文化文政・天保期）に、千葉市・佐倉市・旧印旛村・佐原市などで増加、印旛沼西端の白井市・八千代市・印西市・船橋市にも広がるが、江戸川べりの浦安市・市川市・流山市などでは全く建立されない。

近・現代は、白井市・八千代市・印西市・佐倉市・千葉市などの地域に偏って分布する。

江戸後期からは主尊が未敷蓮華を持って半跏坐で正面を向き授乳している像が主流。優雅に天衣をまとう像や、子が這い上がろうとする動的な表現など、華麗で円熟した作がある一方、軟質石材の安易な彫りも多い。近代は、豊満さを強調した母子像や、細部まで像容を同じくする意匠の定番化がみられる。

(4) 考察：「子安像塔」成立の背景

元禄から寛延年間に、「子安大明神」石祠や「子安観音」石仏などの子安像塔が生み出された背景には、①ムラに伝わる古来の子安神信仰と、十九夜念仏や

月待ちの女人講の習俗、②石仏を彫る技術の普及、③「慈母観音」像の特徴である「子を抱く慈母像」への女性たちの共感があった。

慈母観音像は、16～17世紀初頭、中国で「送子観音」と「白衣観音」が融合して成立し、日本にも多量に輸入された白磁製の像で、母性愛と心の癒しを与える具象的な像であったことから、17世紀半ば、「子安観音」として各地方に普及、浸透していったと考えられる。

表2. 北総10市町村の女人信仰の石塔数（年代別、月待塔の大多数は十九夜塔）

年代	1652-1700	1701-1750	1750-1800	1801-1850	1851-1900	1901-1950	計
月待塔	126	213	196	123	43	10	711
子安像塔	0	2	27	79	146	108	362
子安石祠	0	6	23	16	10	7	62
	126	221	246	218	199	125	1135

図1. 北総10市町村の女人信仰の石塔数の年代別グラフ

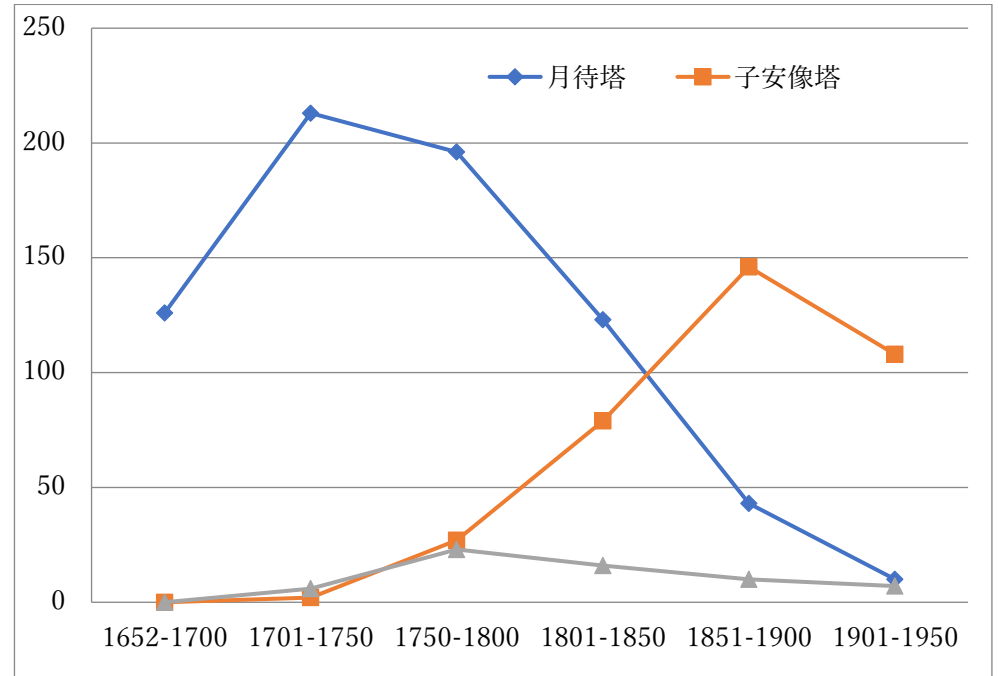


図2. 白井市内の十九夜塔と女人信仰の如意輪観音像塔



図3. 白井市内の子安石祠



図4. 白井市内の江戸後期の子安像塔



図5. 白井市内の近現代の子安像塔

